

後藤新平

人の世話を
なすぬやう
くれおぼわと
するやう
りてむくいな
もめぬやう
新平

レール間の幅を広げた高速鉄道、
防災も考慮した公園の整備、
水道や電気などライフラインを
まとめて1本の地下溝に通す
共同溝の建設……。今でこそ
当たり前前に目にする光景を
明治・大正時代の日本で
訴えたのが後藤新平です。
百年先を見通すといわれた
理由がこれらにあります。
新平は自治の精神の大切さを説いて
健全な国民の育成にも力を注ぎました。
彼が将来を見通していた愛用の鼻眼鏡に
現代の社会はどのように映っているのでしょうか。



自治三訣（じちさんけつ）

わたしたち奥州市の先人後藤新平は、自治三訣を提唱しました。

「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして報いを求めぬよう」

この言葉は「自治こそは人間生活の根本であり、信と愛の奉仕こそは社会生活の源泉である」と解釈されています。「自治」とは、自らのことは自ら処理すること。自ら考え、自ら責任を持って行動すること。まさに「人のお世話にならぬよう」です。

新平は晩年、少年団（ボーイスカウト）日本連盟初代総裁（後に総長）に就任し、熱心に取り組みました。子どもたちがボーイスカウトでさまざまな体験をする中で、自分自身を理解し、社会に何か役割を果たす「社会の一員」であるという意識を持つてほしい。また、仲間や周囲の人たちと協調することで、社会で生きる者としての自覚が芽生えてほしいと願っていたからです。お金や地位ではなく、将来を担う人材を後世に残すことを望んだ新平の本意だったのです。

